

最後の一週間

混雑の激しくなってきた歩道橋の上で、ベビーカーをたたみ、新奈を抱いた。かなりの人ごみで不安になった私は、主人に引き返そうと言おうかどうか悩んだ。だけど、ベビーカーを親切にも持ってくれた男性は何人か前に進んでいたし、主人と私の間にも何人も人がいて、後ろに引き返そうと言えなかった。実際のところ、引き返そうと言ったとしても、無理な状況にあった。そんな状況ではあったが、後ろにいた高校生ぐらいの浴衣を着た女の子に、新奈はあやされて笑っていた。その女の子が差し出した手を不思議そうにさわりながら・・・この頃の新奈は、何にでも興味を示していた。いつも目をキラキラさせながら・・・女の子は友達に「かわいいー」と言っていた。それを聞きながら、新奈を抱いていることの幸せを感じていた。その後あんな事故に巻き込まれるなんて想像もしなかった。そしてもう二度と新奈を抱きしめることができなくなるなんて、思いもしなかった。あの人の壁のような圧力の中、必死で新奈を守ろうとしたが、私は守りきれなかった。主人に「死んでも離すな！」といわれた時、もうすでに手が離れてしまった後だった。私自身、息ができなくなり死を感じたとき、心の中で必死に思った。私は死んでも新奈は助かりますようにと。

主人が子供たちを捜しに事故現場に戻ったときも、手を組み新奈が無事でありますようにと祈り続けていた。だけど、新奈はすでに息をしていなかった。現場のエレベーターの中で新奈を抱いた時、あまりにも軽く新奈ではないように感じた。私は「にいな」と叫びながら、新奈を揺り動かしたがまるで人形のような感じ。エレベーターの前で人工呼吸をされている新奈を見守りながら、周りの人々に「救急車はまだですか！」と叫び続けた。いつの間にか、機動隊の姿も見えなくなり、周りには遠巻きに見ているばかりだった。かなり時間がたった頃、主人がきて「何でまだこんなところに、おるねん！」と叱られた。その後、主人が婦人警官を連れてきて、やっと警備本部テント前の臨時救護所の所に案内されたが、テント前に敷かれたビニールシートは冷たく水にぬれていた。いっこうに息を吹き返す気配のない新奈の耳元で、必死に言葉をかける。「にいな、おかあさんよ。にいな、がんばれ！にいな、おかあさんはここよ。」救急車では、ベッドと運転席の間のいすに寝かされた小さな新奈。ぐったりとして、医者に心臓マッサージを受けている新奈を呆然と見ていた。狭い救急車の中、そばによることもできなかった。

病院についてからは、ずっと新奈の耳元で声をかけ続けた。

「息をすると胸が陥没するのは、肋骨が折れているからです。赤ちゃんの場合、心臓マッサージをすると、骨が弱いのでどうしても肋骨が折れてしまうのです。」

と、医者に説明を受けてはじめて、新奈が息を吹き返したのが解かった。

10時10分ごろのことだった。事故から1時間30分もたっていた。

10秒に1回くらいしか息をしない新奈。

その呼吸に合わせて酸素ポンベのポンプを押しながら、

「にいな、おかあさんよ。にいな、がんばれ。にいな、おかあさんはここよ。にいな、ごめんね。」と、新奈の耳に口付けるようにしながら声をかけつづける。

新奈の目がうっすらと開き白目が見える。不安になり医者に訴える。

「白目が向いているんですけど」

「体が冷たくて、大丈夫なんですか？」

医者は、「点滴をするため、足の付け根を少し切ってもいいか」と聞いた。

新奈の体に傷をつけることにためらいを感じながら「はい」と答えた。

それで新奈が助かるならと思った。

細い糸みたいな血管のうえに、ショックで体が萎縮してしまっているの、点滴がなかなか入らない。

「おしっこがでてくれたらな」という医者の言葉でさらに不安が増す。

はだかでベッドに横たわる新奈、体が冷たく血の気のない顔。

外傷は左頬の下にあざのようなあとがあるだけだ。

これまで見たことのない新奈。目の前にいてふれていても信じられなかった。

いっこうに主人と連絡がとれなくて、歩香の安否もわからず不安でしかたがなかった。

10時40分ごろ、やっと主人と連絡がつき、新奈が息を吹き返したことを告げた。

それを聞いた主人は、「やった！」と喜んだ。

しかし、私は不安で不安でしかたがなかった。本当に大丈夫なのだろうか？

片時も新奈のそばを離れたくなかった。

「にいな、がんばれ。おとうさんもすぐ来るよ。」

主人がやっと病院に到着したのは11時30分ごろだった。

小児科のある病院へ搬送するため、再び救急車に乗り込む直前だった。

まだ歩香の所在はわかっていなかった。

もう22日になっていた。

新しい病院で新奈は、たくさんの医者や看護婦さんに囲まれ、近寄ることもできなかった。

カーテンの外から見てお医者さんは難しそうな顔。

今にも、息が止まってしまうのではないかと不安だった。

歩香は警察に保護されていたことがわかった。

午前2時ごろ、私の母がやってきた。母の姿を見たとき涙が出た。

二人で抱き合って泣いた。
歩香も親戚に連れられてこわばった顔でやってきた。
耳が真っ赤にはれ、両足には打撲のあとがあった。
それでも歩香の無事を感謝し抱きしめた。
新奈は集中治療室へ運ばれた。

入院に必要なものをとりに自宅に戻った。
母が、新奈の紙おむつを袋ごと全部持っていこうとしたのを見て、
「もう新奈が家に帰ってこないみたいじゃない！」涙が出た。
歩香は私の妹に預け、再び病院へ戻る。
集中治療室の前、まだ午前6時。
主人は午前4時ごろ面会を許されて、新奈に会えたらしい。
私が戻ったら、会わせてくれるとのことだったが、会わせてくれなかった。
新奈に最後のおっぱいをあげてから、半日以上たち、胸が張りすぎて苦しくなっていた。
家からもってきた搾乳機で搾乳すると、あっという間に容器いっぱいになった。
これを新奈に飲んでもらえるのが再びやってくるのか、悲しかった。
主人が、産婦人科の看護婦さんに「希望は捨てたくないから」と、
搾乳した母乳を保存してくれるよう頼んでくれた。

午前10時、やっと面会が許された。
新奈は病院の服に着替えていて、小さなベッドに寝かされていた。
ベッド自体がヒーターになっていて、新奈の体は温められていた。
自分で自分の体温を保つことができないのだ。頭は氷嚢とアイスノンで冷やされていた。
脳細胞を守るためには頭は冷やす方がいいと説明された。
昨夜、最後に見たときよりは、顔に赤みがさしてみえた。
しかし、呼びかけに反応をしめすことはなかった。
自発呼吸もできなくなっているようだ。
それでも、主人といっしょに声をかけ続けた。
「にいな、お母さんよ。にいな、がんばれ。にいな、抱っこしたいよ。」
一瞬、新奈のまつげが震えたように感じた。
見間違えかと思ったが、主人もそう見えたと言った。
新奈には私たちの声が聞こえているのだと信じたかった。
面会は一日、10時、12時、15時、18時、の4回。1回30分ぐらいだけだ。
集中治療室に入るには白衣をつけ靴を履き替え、手を清潔に洗う。
その着替え場所が狭く、他の面会者といっしょなので、息苦しく感じる。
面会以外の時間は、ただ集中治療室の前のいすで祈るばかりだ。

その日、午後9時ごろ小児科の先生から症状についての説明があった。

「窒息により低酸素状態が長かったため、全臓器不全、最重体の状態にあります。

脳への低酸素状態の影響は2日くらい遅れてあらわれてきます。そのとき、脳のはれが脳神経をどこまで侵すのか、どこまで耐えうるのか、何ともいえません。

ただ、赤ちゃんの場合、頭の骨がやわらかく固まっていないので、脳のはれの逃げ場があるのですが……。

おしっこができれば体の老廃物が排出され、血液の状態もよくなるかもしれません。血液の状態がよくなれば、容態もいい方向に向かうかもしれません。

我々は、尿の一滴までも固唾を飲んで見守っている。が、今のところ全くでていません。

子供の場合、どのような状態でも1週間はみてくださいと言っています。

大人と違う生命力があって最悪の状態でも、1週間も頑張ることもあります。

こう、お話していても、明日にもけろっとよくなるかもしれない。

そんな不思議な生命力が子供にはあります。我々も全力を尽くします。」

絶望的な気持ちになりながら、新奈に声をかける。「にいな！」

奇跡が起きた。

新奈がうっすら目を開けて、私を見た。そして主人を見た。

事故の後、最初にして最後の、新奈と目を合わせた瞬間だった。

23日午前7時に呼び出された。

通常の面会時間外である。不安を感じながら集中治療室に入った。

新奈の顔がむくんでいる。

「脳のはれははじめ、1時間ほど前から脳の反応がなくなりました。」と告げられる。

おしっこも全くでていない。

昨日の夜、目を開けてくれたのに、どうして。

私たちがそばについてずっと声をかけつづけることができたなら……。

それでも声をかけずにはいられなかった。

「にいな、がんばれ！」

朝食を食べていても、新奈が気になり主人より先に集中治療室前に戻る。

酸素マスクの酸素濃度100%。普通の空気では、酸素が足りないのだ。

この日はじめて、歩香も新奈に面会をした。

通常なら、集中治療室に子供は入れないのだが、新奈に何かいい反応があるかもしれない。

子供たちもお互い会いたいと思っているはずだと言われ、医者に許可された。

むくみの出始めた新奈だったが、歩香は臆することもなく、

「にいな、にいな」と声をかけていた。二人を見て涙がでた。

「私たちに何かできることはないのですか」

医者は、音楽やおもちゃの音を聞かせたりして、脳に刺激を与えるぐらいしかないと言う。

この日、私は自宅に戻り、今まで新奈の成長を記録してきた8ミリビデオと、おもちゃを持ってくることになった。

8ミリビデオには、新たにシャワーの音と、蝉の鳴き声を録音して持っていった。最近の新奈は、朝は蝉の鳴き声で、早起きをしていたからだ。これで、目がさめてくれたらと祈るような気持ちだった。

翌日24日。10時の面会に間に合うように病院へ到着。

昨夜、主人は新奈の服を抱きしめて寝たそうだ。

新奈の枕もとにおもちゃを並べ、耳元で聞こえるように鳴らした。

8ミリビデオも再生して新奈に今までの生活の音を聞かせた。

新奈と歩香の二人が仲良く並んでいる写真も枕もとに飾った。

「にいな、がんばれ。にいな、おしっこだそうね。にいな、元気になろうね。」

新奈の手のひらに自分の人差し指を差し出す。ぎゅっと握ってくれる新奈。

医者は、反射だと言う。

しかし、私たちには新奈の意志で握りしめているのだとしか思えなかった。

新奈が必死で生きようと頑張っているのだと思えた。

かなりの力で、手を離す時には指をひらかせないとだめなぐらいだった。

手足が冷たくなっている新奈のため、私の手編みのミトンと靴下を持ってきていた。

しかし、寒い冬生まれの新奈のため編んだもので新生児用だった。

点滴でむくんだ新奈の足に靴下は入らず、結局、歩香がお気に入りの靴下を履かせた。

ミトンはかろうじて新奈の手にはめることができた。

看護婦さんに「おしっこが管の方ではなく、もれてでてきているようなので、

もっと紙おむつを持って来てください。」言われ、

おしっこが出始めたのだと思い、喜んで買い物に行った。

この日、私の妹たちが折った千羽鶴をベッドの近くに吊り下げてもらった。

千羽鶴には新奈へのメッセージが書いてあった。

「にいなちゃん、早く元気になってね。」

「いつもの、かわいい笑顔を早く見せてね。」

「がんばれ新奈ちゃん」

歩香の精神状態がよくない。

どのように事故に巻き込まれたのかわからないうえ、私たちがそばについてあげることもしない。夜は私たちが帰ってくるのをまって、夜中まで起きているそうだ。

今日も病院に来たけれど、帰りが泣いて泣いて大変だった。

そんな姿の歩香を見て、また涙が込み上げる。

このままでは、歩香が心配なので主人と相談して、

明日からは歩香といっしょにホテルで宿泊することに決めた。

何をしていても、新奈のことを思うと、胸が悲しみに押しつぶされそうになり、息もできないくらいに苦しい。

あまりの苦しさに主人に言うと、「僕たちが、気弱になってどうするんだ、絶対元気になる。」と叱られ、私も元気になることを信じて頑張ろうと心に誓った。

25日、新奈のむくみはますますひどくなっている。

顔の赤みが増しているのは、むくみのせいかな？

しかし、手を握る力は衰えていない。手を握る時、腕の付け根の胸が盛り上がるほど、一生懸命に握り返してくれる。

「がんばれ、にいな。」

枕もとには、看護婦さんが作ってくれた、あんぱんマン、食パンマン、くまのぷーさんの絵が飾られていた。面会に入るたび、キャラクターの絵が増えていく。看護婦さんたちも、応援してくれているのだ。

医者に、「おしっこがでないのなら、人工透析はできないのか？」と問いかける。

しかし、人工透析をするための手術に新奈の体は耐えられないと言われた。

今日からホテルで歩香といっしょに宿泊できるようになった。

車の中でお昼寝をしていた歩香は、病院についたよと言われると、

「ああ、良かった」と言って目を覚ましたそうだ。

私たちに会うと「抱っこ」といってしがみつき、離そうとしない。

どれだけ、親を必要としていたことか。歩香に申し訳なくて涙がでる。

ホテルの部屋に入っても、今日はここでいっしょに寝るのよといっても、歩香は信用できないのか、私たちのそばを離れない。

私たちの動きがとりやすいようにと、私の母もいっしょにホテルに泊まる。

夜の10時すぎ、ホテルの部屋の電話がなる。息が止まるかと思った。

病院からかと思い、受話器をとる手が震えた。しかし、主人のお姉さんでほっとする。

お姉さんに、東洋医学で腎臓に効くつぼを調べてもらえるようお願いする。

西洋医学でだめなら東洋医学でと、なんでもいいから新奈を助けたかった。

26日、新奈のむくみはいっこうに治まらない。手の力が弱くなってきた。

体のむくみのため、皮膚が伸び、薄くはがれやすくなっている。

鼻血がでてくる。体内で出血が止まらないのだ。

むくみで皮膚が引っ張られ、薄目が開く。精気のない目。

目が乾燥しないように目の上にガーゼをのせる。

口も開き、舌がみえる。

母乳を綿棒に含ませ、新奈の舌を湿らせる。

一瞬、新奈の舌が動いたように感じた。

「にいな、お母さんのおっぱいだよ。元気になろうね。」

新奈の舌を湿らせた綿棒もすぐに血に染まる。口の中も出血しているのだ。

お姉さんに調べてもらった足裏の腎臓のつぼを押す。

血のめぐりが悪くなっているので、押したところの皮膚が白くなって、

なかなか肌色がもどらない。それどころか、足裏に水ぶくれができてしまった。

それでも、声をかけながら、押しつづけた。

「にいな、お母さんだよ。にいな、がんばれ。にいな、元気になろうね。」

主人が、産経新聞の取材を受けた。新奈が頑張っている記事を見て、

新奈の症状を良くするための、救いの手が欲しかった。

夜、歩香が小さな打ち上げ花火（市販のもの）の音にパニックになる。

その場で身動きもできなくなり、必死の形相だった。あわてて駆けつけ抱きしめた。

歩香は外傷より、心が心配だった。

27日、「血液中に、カリウムの値が増えてきました。今は体の中に戻すための点滴で抑えています。その点滴で抑えられなくなると心臓に不整脈がでてきます。手は尽くしていますが、もうこれ以上打つ手はないのです。」と、医者に言われた。

絶望的になりながら主人と二人、声をかけつづける。

「にいな、がんばれ。いっしょに家に帰ろう。どこにもいかないで。」

新奈の舌を綿棒に含ませた母乳で湿らせる。

「にいなに、おっぱい飲んでほしいよ。」

胸も張らなくなってきていた。

相変わらず、おしっこはでていない。

それどころか、便といっしょに小腸の壁がはがれて出てきているようだ。

新奈の体はボロボロだった。

「新奈は、痛みを感じるのでしょうか？」

医者は、「何も感じていないと思います。」と、言う。

それだけが、せめてもの救いだった。

産経新聞の夕刊に新奈の記事が載った。

これを読んだ医療関係者が、何かアドバイスをくれたら、神に祈るような気持ちだった。

28日の朝、目覚めて、病院から呼び出しがなかったことにほっとした。

昨日の医者の言葉に、いつ呼び出しを受けてもおかしくない状況にあるのだと感じたからだ。はじめに医者に言われた1週間がたった。

今日の新奈は、体のむくみが少し治まったように思えた。

しかし、新奈の体の状態を表す機械の数字は悪くなっていくばかりだ。
主人のお姉さんから連絡が入り、知り合いの整体士の先生が小田原から駆けつけてくれることになった。お姉さんに新奈の状態を話しながら、それでも間に合ってほしいと願った。
午後3時の面会の時、新奈が安らかに普通にねむっているように見えた。
これまで1週間ずっと見てきたけれど、はじめて感じたことだった。
そう主人に言うと、主人もそう感じたそうさ。

この日、私の妹たちもお見舞いに来てくれていた。
ホテルの部屋で、新奈が今日一日だけで、体の状態を表す数値がどんどん悪くなっていくようだと話していたときだった。

携帯電話がなった。午後4時半すぎのことだった。

「集中治療室の看護婦です。今すぐ、どうなるというわけではないのですが、新奈ちゃんの状態がよくないので、ついていてあげてください。」

とうとう恐れていた時がやってきたのだ。

歩香は妹たちに預け、主人と二人、病院に駆けつけた。

すぐ集中治療室に入る。

「にいな、がんばれ。にいな、お母さんよ。にいな、どこにもいったらだめ。」

声をかけ続ける。主人も私も涙が込み上げる。

そうしている間も、新奈の心拍数が小さくなっていく。血中酸素の値が落ちていく。血圧が低くなっていく。

胸が押しつぶされそうに、苦しくなって、いったん集中治療室をでる。

そして歩香を連れてきてもらえるようホテルにいる母に電話した。

落ち着くまもなく、集中治療室へ入るように指示があった。

ずっとそばについていて下さいと言われた。

「にいな、お母さんよ。どこにも行ったらいやや。どこにも行かないで。」

しばらくしたら、母に連れられて歩香が、そして妹たちがやってきた。

歩香には状況がわからないだろうが、それでも新奈に声をかけた。

「にいな、がんばれ」

みんなで泣きながら声をかけ続けた。

そんな中、歩香はねむってしまったので、妹たちに連れ出してもらった。

主治医の先生が突然「お母さん、抱っこしますか？」と言われた。

あの事故の日以来はじめて抱っこした新奈は、あまりにも重たかった。

おしっこがでなかった新奈は体中に水分がたまっていたからだ。

「にいな、ごめんね。にいな、守ってあげられなくてごめんね。」

泣きながら、新奈の頬にほおずりした。

そのとき、小田原の整体士の先生がやってきた。間に合わなかった。

医者が、私の腕の中にいる新奈の胸に聴診器をあてて言った。

「午後6時36分、お亡くなりになりました。」

すべてが終わった。

たった163日の人生だった。

早く新奈を家に連れて帰りたかった。

そして新奈の最後の夜を4人でゆっくり過ごしたかった。

家に帰り着いたときにはすでに午前2時をまわっていた。

いつも使っていたベビーベッドに、いつものように新奈を寝かせた。

その前で、主人が肩を震わせて泣いた。私もとめどなく涙が込み上げてきた。

ベビーベッドの前に布団をしいて、新奈が生まれて初めて家族4人いっしょに並んで寝た。

翌朝、もちろん新奈は目覚めない。

朝早くから、葬儀屋、会社関係、親戚、マスコミから、来客や電話で落ち着かない。

悲しみに浸るひまも与えてくれない。

遺影には、寝返りができた新奈が、にっこり笑って、口からよだれがこぼれているものを選んだ。そのよだれも、おっぱいの後だったみたいで、ミルク色だ。

新奈は、よだれが多く、いつもベビー服の襟元がぬれていた。

葬儀屋に、「希望の花はありますか？」と聞かれ、「ひまわり」と答える。

あの事故に巻き込まれなければ、翌22日に南光町のひまわり畑に行く予定だったのだ。

新奈にひまわり畑を見せてあげたかった。きっと目をキラキラさせて喜んだだろうに。

六甲のあじさいを見せたときの新奈の姿を思い出した。

あの歩道橋の上で女の子の手を不思議そうにさわっていたように、

あじさいの花びらをさわっていた。そんな新奈が愛しくて幸せだったのに。

葬儀会館についてから、新奈がいつも着ていたベビー服に着替えさせた。

新奈はこの1週間で、点滴のため、かなり体が大きくなってしまったので、

余裕のあった服がぴったりになっていた。

新奈の手形をとった。思いのほか体は柔らかかったが、うまく取れなかった。

新奈の手がよごれ後悔する。

1週間、頑張り続けた新奈の体を、これ以上いためることはしなくなかった。

いよいよ棺の中に入った新奈には、もうふれることもできない。

よく遊んでいたおもちゃ、ベビージムの赤と緑のボール、赤いガラガラ、

赤のバス、赤い歯固めを頭の周り並べた。

寒くないようにと私の手編みのベストとミトンと靴下をいれた。

靴下は、いつのまにか片足を紛失してしまっていたので、片足分だけ入れた。

紙おむつと、そして、着替えにとまだ袖を通したことの無い新しいベビー服をいれた。
通夜には主人の会社関係の人をはじめ本当はたくさんの人たちが来てくれた。
その対応に追われ、ゆっくり新奈のそばにいることもできない。
深夜になって、はじめて主人と私の妹夫婦たちと、ゆっくり話しすることができた。
1週間よく新奈が、頑張ってくれたことを。
あの事故の現場で、一人いってしまうのではなく、私たちに1週間の時間をくれたことを。
私たちと、たった1度、目を合わせるために1週間頑張ってくれたのだと思えた。

遺影を見ると、新奈のよだれがきれいに修正されている。
葬儀屋の人が気を使って修正してしまったようだ。
しかし私たちは、そのよだれこそが新奈の証のように思えていたので、
急遽もとどおりに直してもらった。
告別式の前、特別に棺から出してもらった新奈を抱っこした。
これが新奈を抱っこできる最後だった。
私は冷たくなった新奈を抱きしめながら、元気だったころのように体を揺り動かしていた。
いつも新奈を寝かせるときのように。
「にいな、ごめんね。守ってあげられなくてごめんね。」
そして、主人が新奈の髪の毛を少し切った。
「はじめての散髪が、こんなときだなんて・・・」
いつまでも抱きしめていたかった。
昨日は棺に入れたが、なくなっていた片方の靴下が見つかったので、棺からもう片方の靴下を取り出した。「この靴下はお母さんにちょうだいね。」
新奈は、病院ではかせた歩香の好きだった靴下をはいていた。
靴下の中の足は、包帯が巻かれていた。「これだったら寒くないよね」と主人が話かけた。
最後に棺には、この1週間ためてきた母乳をいれた。
告別式も、通夜の時と同じようにたくさんの人が参列してくれた。
主人が挨拶する。いよいよ最後かと思うと涙があふれだす。
「本日はご多忙の中、新奈の葬儀に、ご参列下さいまして誠に有難うございました。
遺族・親族を代表致しまして一言ご挨拶させていただきます。
葬儀・告別式もおかげ様で滞りなく終了いたし、出棺の運びとなりました。
このように多数の皆様方にお見送り頂き、新奈もさぞかし喜んでいいることと思います。
事故で心臓が止まってから1時間半後に息を吹き返し、気力で1週間も私たちの目の前で
新奈は頑張ってくれました。目をつむりながらも、力強く、その小さな手で私達の指を離そうとはしませんでした。
へこたれそうになっている両親を逆に励ましてくれている様でした。
一生懸命開こうとしたまぶたの奥の瞳が、私と妻の視線でぴたりと止まった時、びっくり

した医師達の顔をよそ目に、私達は幸福感で満たされました。
新奈が教えてくれた頑張りに、私達も負けない様応えていこうと思います。
本日はお忙しい中、誠にありがとうございました。」
涙が止まらなかった。
いよいよ出棺前の、最後の別れである。
ひまわりの花を新奈の顔のまわりに飾る。
歩香とおそろいで色違いのぬいぐるみをいれた。
そして、祈りの千羽鶴をいれた。

親戚、私たちの友人、知人たち、マスコミに囲まれての出棺だった。
小さな新奈自身の友達など、だれ一人いないのだった。

大勢の人に見送られて、新奈は幸せだなんて、きれい事だ。
どうして小さな娘を親が見送らなければならなかったのか？
たった5ヶ月しか生きることのなかった新奈の葬式をしなければならなかったのか？
許せない、警察！明石市！警備会社！
新奈を返してほしい。
私たち家族の幸せを返してほしい。
それ以外なにもいらない。

多田 洋子